

# 京都市景観シンポジウム「新景観政策の更なる進化」 結果概要

- 1 日 時 平成30年12月22日（土）午後2時から午後5時
- 2 場 所 キャンパスプラザ京都 4階第3講義室
- 3 テー マ 新景観政策の更なる進化
- 4 参加者数 約180名
- 5 プログラム

## 第1部 基調講演1 持続可能な都市のデザイン

- ・川崎 雅史 氏（京都大学大学院教授，京都市都市計画審議会持続可能な都市検討部会部会長）

## 第2部 基調講演2 新景観政策の更なる進化

- ・門内 輝行 氏（京都大学名誉教授，大阪芸術大学教授，京都市美観風致審議会会長，京都市新景観政策の更なる進化検討委員会委員長）

## 第3部 パネルディスカッション

- ・コーディネーター：門内 輝行 氏
- ・パネリスト：川崎 雅史 氏，  
河島 伸子 氏（同志社大学教授（文化政策論）），  
中嶋 節子 氏（京都大学大学院教授（都市史・建築史）），  
畑 正高 氏（一般社団法人京都経済同友会 景観委員会 委員長，株式会社松栄堂 代表取締役社長）



第1部 基調講演1



第2部 基調講演2



第3部 パネルディスカッション

## 講演及び意見の概要

### 第1部 持続可能な都市のデザイン（川崎 雅史 氏）

- ・ミクストユースからなる拠点エリアは、多様性を包含する。そのウェイトは拠点ごとに異なるが、商業や文化など、様々な活動をダイナミックに融合していくことが望ましい。そして、その基盤となるが、京都の風土であるといえる。
- ・「文化と産業の息づく持続可能な創造都市」というキーワードが都を進化させると考える。都市計画と景観政策を柔軟に連動させて、拠点エリアごとにしっかりとビジョンを立て、にぎわいや生産の場をデザインすることが景観政策の進化の役割でもある。

### 第2部 新景観政策の更なる進化（門内 輝行 氏）

- ・地域には、自然・歴史・文化等から生じる固有の地域資源が存在しており、それらが関連し合っで多様な特徴のある景観が形成される。資源を探し、それを核にして、まちをつくっていくことが大事である。
- ・市民が主体となり、個々の場所に即してまちづくりを行うというかたちが、大事である。
- ・視覚的な形態のデザインを制御するだけではなく、景観をつくっていくシステムそのものを変革していくことが重要である。そのためにも、総合行政や、都市の文化の向上、地域における将来ビジョンの共有が必要である。

### 第3部 パネルディスカッション

- ・大事なものは、内側にある都市の人格のブランディングである。見せかけだけのお化粧をするのではなく、そのまちが持っている文化性をまちの人たちが見直し、新たに必要な部分に投資をし、資産の再整理を行うことが必要である。さらに、その出来上がった人格そのものを外にどううまく訴えるかということも、もう一つ違う技術として考えていくことが望ましい。
- ・景観とは、そこに住んでいる人たちの意識や文化が、まさに反映されたものである。景観が劣化することは即ち、そこに住んでいる私たちの意識や文化のレベルダウンを意味しており、それが物理的な事象として見えてしまう現象である。京都市だけでなく、市民、企業、そして国、府など、京都で活動する様々な立場の主体が景観というキーワードを基に同じルールを意識しながら将来を見ていけると良い。
- ・市街地を取り囲む三山の美しさを継承するとともに、市民の参加により地域の力を付加していくことで、人々の生活がつくる地平として景観の豊かさを担保していくことが必要である。さらに、今後は、大極殿や聚楽第、あるいは琵琶湖疎水の施設のように、時代を感じる図としての景観をつくっていく必要がある。
- ・広場の整備や道路の再編により、市民の活動の場を公共空間に求めていくという動きが世界的な潮流となっている。それは、敬愛する風景を見たいからである。そのためには、下支えする産業や文化の基盤を都市全体で支えないといけない。
- ・経済というのは人々の感性で捉えられる面があり、そういった経済を実現していくことで新しい世界をつくる。つまり、文化や美や景観という、いままで大変弱かった存在を、むしろ基軸にして都市をつくっていくということが必要である。